

令和4年水稻管理のポイント

- 中干しの時期を迎えています。大きなヒビが入るようなら入水を行い、干し過ぎに注意しましょう。
- いもち・紋枯病が前年度発生している圃場は必ず防除を行いましょう。
- 7月上旬までに地域ぐるみの畦畔草刈りを行い、斑点米発生を防ぎましょう。

☆食味向上に向けこれから実施して頂きたいこと！！

①土壌改良資材の散布を行いましょう（6月下～7月上）

ケイ酸は稲体を形成する重要な要素です。

ケイ酸を十分に吸収することで、病気や倒伏に強い稲になります。

土壌中のケイ酸は、稲の生育や排水などによって減少するため、資材で補給しましょう。

散布量の目安	
ようりん	20～40kg/10a
珪酸加里	20～40kg/10a

【リン酸・加里の効果】

リン酸の効果	稲は活着後、本葉5枚頃になると分けつを開始します、その時にリン酸はチッ素と協力し合って、葉・茎・根をどんどん増加させる働きがあります。 チッ素の消化を良くし緩やかに効かせる肥効調整の機能もあります。
加里の効果	粳を大きくする効果があり、粳の奇形が少なくなります。 また稲体を強くしたり根の働きを良くしたりします。

重要です

②水管理を丁寧に行いましょう

◇**間断通水**を徹底し、根の活力維持を図りましょう！

梅雨明け後の高温時の湛水は、根の機能を低下させるので控えましょう。
通水と落水の繰り返しにより根に水分と酸素を供給しましょう。

◇**出穂・開花期の水管理**

この時期は稲体の水分蒸散量が最も多く、たくさんの水を必要とします。
特に穂が出る前の時期は、水田に水がある状態を保ちましょう。

間断通水とは・・・

稲の穂が出るまでは1日通水、2～3日落水を繰り返します。穂が出たら田んぼに3cm程度水を入れたら自然落水させ、水がなくなる前に水を入れるのを繰り返します。

● 土壌水分を保つには



③いもち病の防除及び紋枯病の防除

◇いもちの発生を確認したらすぐに薬剤散布

7月初旬からいもち病の発生がみられます。

箱施薬または予防粒剤を散布している場合でも、発生を確認したら早急にブラシン粉剤を散布する。

対象病害	散布時期	薬剤名	散布量	薬剤効果
いもち病	7月上～中旬	ブラシン粉剤 (2成分)	3～4kg/10a	予防・治療

◇紋枯病の常発圃場では徹底防除

あきさかり等の茎数が多い品種は、紋枯れ病が発生しやすいので予防剤を散布する。

対象病害	散布時期	薬剤名	散布量	薬剤効果
紋枯れ病	7月上旬	リンパー粒剤 (1成分)	3～4kg/10a	予防



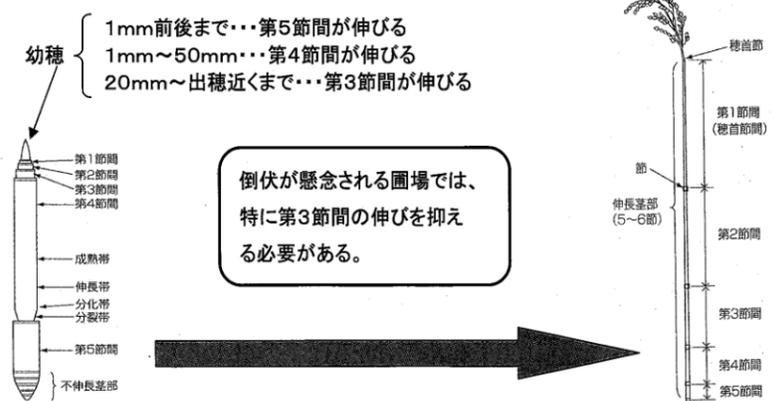
④倒伏軽減剤の使用

7月15日頃に草丈80cm以上で葉色が濃く、葉先がひらついている圃場は要注意です。

資材名	使用量・方法	使用時期
ロミカ粒剤 (1成分)	2～3kg/10a 水を張って散布 スポット処理可能	出穂25～10日前まで 5月半ば植コシヒカリで (7月10日～7月25日)

※倒伏軽減剤を使用する圃場では1回目の穂肥の施用をやめるか量をへらし調節しましょう。

穂肥と同様、幼穂の長さを確認しながら適期を判断しましょう。



⑤畦畔の草刈りを徹底しましょう！

7月2日・3日は**第2回県下一斉草刈りデー**です。カメムシの生息密度を下げるため、必ず畦畔の草刈りを実施しましょう。ただし、出穂期直前や出穂以降に畦畔の草刈りを行うと、カメムシが水田内に侵入し斑点米が増加しますのでやめましょう。